

私の詩作の経緯

(原題：我的詩作的經過 郭沫若全集 第 16 卷)

顧 雯* 翻訳

岩佐 昌璋**解題

My Experience in Writing Poetry

Contained in Vol.16 of the Complete Works of GUO Moruo Translated from
Chinese and Annotated

by

GU Wen

IWASA Masaaki

(Received October 31, 2011)

多くの友人が今でもまだ私のことを「詩人」と言っているのだが、私自身はいささか心落ち着かない。「詩人」という冠が私の頭に合わないように思うからだ。しかし、私が詩を作ったこと、それも新詩を作ったこと、これは事実である。また幾冊かの新詩集を出版したことも事実である。これらの事実はたったの十数年の歴史しかないのだが、この歴史はまもなく考古学の領域になりそうだ。最近ある批評家¹が私の詩について論評しているのを讀んだ。彼は『瓶』を以って、私の「最後の詩」、「残っていた情熱の最後の火花」であるという。また私の「最も良い詩は『創造週報』に発表した詩なのだが、しかしなぜか、『沫若詩集』²（現

代版）には収録されていない」と書いている。しかし、『瓶』の後に更に長い「連続の詩篇」である『恢復』のあること、『創造週報』に発表した私の詩は『前茅』という詩集にも収録していることを彼は知らないのだ。また『恢復』と『前茅』の二冊は現代版初版『沫若詩集』にも含まれているのである³。

このように私の詩が人為的に埋没されていることに鑑み、また現在でもまた私の詩に論評の興味を抱いている人がいるのを考慮して、私はいつそのこと自分で「私の詩作の経緯」を一篇書きあげる気持ちになった。

詩ということになると、旧体詩も含めるなら、私の詩作の過程は相当長いものになる。私自身が科挙時代の余波にさらされた人間である。「八股文」を作ったことはないが、「賦得体」形式の「試

* 東海大学総合経営学部マネジメント学科教授

** 九州大学名誉教授 熊本学園大学教授

本篇ははじめ 1936 年 11 年上海『質文』月刊第二卷第二期に発表された。

¹ 作者原注：韓侍桁『郭沫若詩歌の反抗精神』（『今代文芸』第二期）

² 作者自身が編集した詩集。1928 年 6 月に上海創造者出版部初版、1929 年 12 月に上海現代書局第

3 版

³ 『沫若詩集』創造社出版部版には『恢復』と『前茅』の作品を収録していない。1930 年現代書局版の第 4 版にはじめて『恢復』と『前茅』の作品を収録した。

帖詩」¹と、こうした詩の基本——二字から七字以上の対句を作ったことはある。これらの基本は七、八歳の時から始めたものだ。だけれど始める前の準備、即ち読詩や、平仄四声などの学習はそれより更に早くから始めた。五歳の学問開始の時から『三字経』、『唐詩正文』、『詩品』²などの類を読み、その後に読んだ『詩経』、『唐詩三百首』、『千家詩』³の類に至るまで、すべてが詩作の基礎を固めるためのものだったと言える。これらの基礎固めと練習から、十三歳で小学校に入って、新式教育を受けるまで、ありふれた旧体詩句も幾つか学び、時には今でも鮮明に記憶に留めている幾つかの絶句の短章も作ったことがあるが、しかし真の詩的な趣味と才能は未だ覚醒していなかった。

私の詩の覚醒期と言え、私自身がはっきり記憶しているのだが、民国二年のことだ。当時私はすでに二十二歳になり、また成都高等学堂の一年生だった。当時の四川教育界の英語レベルは相当に低く、中学校の五年間で学んだ英語は、ただチェンバレン（Chamberlain）の『二十世紀読本』の前三冊を読み終える程度で、しかもその中の詩は除かれていたものだった。というのは当時英語の教員は詩を教えないのが慣例だったからだ。彼らは詩が役に立たないというのだが、実は、彼らの大半は詩が理解できなかったのだ。民国二年に高等学校に入ってから、英語の読本は依然チェンバレンの教本だった。この教本の第四冊か、或いは第五冊かの中に、アメリカ詩人ロングフェロー

（Longfellow）⁴作の『矢と歌』（Arrow and Song）をみつけた。それはわずかに二連の短い詩であり、一字も辞書を引かずにすぐ理解できた。この詩に非常に清新さを感じ、まさしく私は「詩」というものにはじめて出会った気分になった。詩の原文をはっきりとは覚えていないし、目下手元にもロングフェロー全集がないので、調べる術もないが、その凡その意味は覚えている。だいたいの意味はこうだ。ある時詩人が矢を放ち、矢は飛び去ったが、後で気づくと、矢は林の中にあった。またある時、詩人が歌を歌い、歌声が飛び去ったが、後に気づくと、歌は友人の耳に残っている。このように単純な対比の反復なのだが、私はそこに詩の真実の精神を悟った。また暗唱できるほど熟読していたのに、しかし何の美感も感じ取れなかった『詩経』、特に『国風』の中に、はじめてロングフェローと同様な清新、同様な美妙を感受したのである。

しかし、われわれのあの時代は、文学をさげすみ嫌う時代だった。実業救国（実業によって国を救おう）、科学救国（科学によって国を救おう）などのスローガンが一般知識人の口癖となっていた。おおむねすこし資質のある人たちはすべて科学や、実業志願のほうに傾いていた。当時の教育体系はこの面ではそのニーズを満足させることはできなかったけれども。このような風潮の下で、私のようにもともと文学に傾いている人間でさえ、文学を同じように軽視していた。詩は、時にはそのマスクをはずし、私にその真の姿（心）をみせることもあったが、それでも私が詩作を拒否し、更に一歩進んで詩と向かい合う意欲を持とうとしなかった。私は民国二年の後半に四川を離れた。かつその年の年末には中国を離れた。四川を離れたのは天津軍医学校に合格したからで、中国を離れたのはその軍医学校に満足できず、日本に逃げたからだ。四川を離れる時には文学書は一冊も持っ

¹ 旧時、古人の成語をとって詩題とする詩には、一般に題目の最初に「賦得」という二字と冠した。この形式は、後に「賦得体」と呼ばれた。科举時代の「試帖詩」もその詩題を成語からとるものが多いため、すべて「賦得体」に属する。

² わが国の最初の詩論の専著。作者鐘嶸（?—約 518）は、字仲偉、潁川長社（今の河南省長葛西）の人。南北朝時期南梁の文学批評家である。

³ 『唐詩三百首』は清乾隆年間に蘅塘退士（孫洙）が編集した唐代の詩選で、旧時に啓蒙教科書として、青少年が詩を学ぶため入門読本の一つであった。『千家詩』も旧時に流行していた児童啓蒙読本の一つである。南宋劉克莊の編集。唐代、五代および宋代の名家の詩作を 200 首余り選んでいる。

⁴ 朗費洛ロングフェロー（Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882）、朗費羅とも訳す。アメリカ詩人。詩集『夜吟』、『奴隷の歌』及び長編叙事詩『ハイアワサの歌』（Hiawatha）を著した。

ていなかった。中国を離れる時には『昭明文選』¹だけを持ってきた。たまたま北平で買って、暇潰しに読もうと思ったのだったが、日本に着いてからも長いあいだ開いたことがない。

私が日本の東京に着いたのは民国三年の正月である。そこで半年かかって東京第一高等学校の予科に合格した——当時の留学生は一年の予科を経て、更に三年の本科を経てから大学に入ったものだ。予科の第二学期、民国四年の前半のことだが、同室のある本科生が学校から数枚の油印の英文詩を持って帰ってきた。それは英語の課外読物だった。私が手にして読んでみると、タゴールの『新月集』から選んだ数首の詩で、『海辺で』(On Seashore)、『眠り盗人』(Sleep-Stealer)とその他の一、二首の詩であった。韻字を踏んでおらず、かつ多くは二連、或いは三連対句の詩で、その清新さ、平易さはじかに私を驚かせ、一躍 20 年若返ったように感じた。当時の日本はちょうどタゴールがブームになっていた。こうして私はタゴールの詩と切っても切れない縁を結ぶことになった。彼の『新月集』、『園丁集』、『ギタンジャリ』、『愛人の贈品』、また訳詩『カビア百吟』(One Hundred Poems of Kabir)、劇作『暗室王』を買ってきて、むさぼるように全部を読んだ。彼の詩の中から詩の美に勝る喜びを感受した。その頃たまにベルギーのメーテルリンクの作品に接したこともあり、英語で彼の『青い鳥』、『タンタジルの死』(The Death of Tintagiles/《唐太几之死》)を読んだことがあった。その詩の格調はタゴールに近いが、しかし、タゴール詩の明朗性こそが、私をますますひきつけたのだ。

タゴールの詩を好きになった以上は、その影響を受けざるを得ない。その時期私は思想の上では汎神論(Pantheism)に傾いていた。少年時代に愛読した『莊子』の中にすべてを開いてくれる輝きを再発見し、更に進んで王陽明への礼讃をス

タートさせ、静坐を学んだ。ある時古語を用いて一つの対聯を作ったことがある。それは「内聖外王一体、上天下地同流」(内なる聖と外の王は一体、上の天と地は流れを同じくす)というもので、自分では非常に得意だった。その頃の傾向はあとひと足で狂気の敷居を越えてしまうところだった。私をこの狂気の一足から救ってくれたのは、おそらく私とアンナとの恋愛だったということになるのか、だがここでその詳細を述べるわけにはいかない。なぜならば民国五年の夏と秋との間にアンナとの恋が始まったのをきっかけに、私の詩作の欲望がようやく本当に発することになったからだ。『女神』に収めた「新月と白雲」、「死の誘惑」、「別離」と「ヴィーナス」はすべて彼女のために前後して作った作品である。『辛夷集』²の序も民国五年のクリスマスに英語で書いて彼女に捧げた散文詩であり、後にあのような序の形式に改めたものである。さらに『牧羊哀話』³の中の幾つかの牧羊歌もほぼその頃のものである。それらの詩は私の最も早い時期のもので、旧式の格調からまだ十分に脱しきれていない。しかし、タゴールを仔細に研究したことがある人なら、私のそれらの詩に表れているタゴールの影響がいかに深刻なものであるかよく分ってくれると思う。

アンナとの恋愛の後に、もう一人私に大きな影響を与えた詩人がいる。ドイツのハイネで、当時私は当然彼の恋愛詩ばかりに接近していた。彼の詩は豊かな人間性が溢れていて、タゴールの超人間的であるのと比べるともっと自然に近い感じした。この二人の詩人の詩を、ある時期翻訳したことがあるが、とりわけタゴールの詩をたくさん選んだ。民国六年の年の後半に私の最初の息子が誕生間近なのに、お金がなく、『タゴール詩選』を編集してみた。中国語と英語の対訳で、更に注釈を

¹ わが国に現存する最も早い詩文選集であり、先秦から齊梁までの詩文 700 篇余りを収録している。南北朝梁の昭明太子蕭統(501-531)が編集したもの。

² 創造社辛夷小叢書の一つ。1923 年 4 月上海泰東書局初版。中には郭沫若の著作を八篇収めている。その序とは『辛夷集・小引』のことで、1922 年 7 月書き改めた。

³ 現在残っているもののうち、作者の最初の短編小説。1919 年の 2、3 月に著す。同年『新中国』雑誌第七期に発表された。

加えたものである。国内の二大書店に手紙を出し、出版販売を依頼した。だが当時の私は中国で無名であるのはもちろん、タゴールさえ知る人もいなかった。それでこの二大書店は相手にしてくれなかったわけだ。『ハイネ詩選』も民国七年の夏休みに試してみたが、同様に引き受けてくれる所がなかった。

民国七年の秋に私はすでに福岡の九州大学医学部に入学し、博多湾の海岸に住居を構えた。その時の詩、「鷺鷥」、「新月と晴れた海」と「春の愁い」等は明らかに依然としてタゴールとハイネの影響下で書いている。

民国八年以前の私の詩、ないし、いかなる文字も、いくつかを親しい友に書き写してあげた以外にまったく発表したことがない。当時胡適たちがすでに『新青年』誌上で白話詩（訳者注：新詩）を提唱し、彼らの試みた作品を発表していた。だが私は日本の田舎にいたため、彼らのうわさは聞いてはいたものの、彼らの大作を拝読したことはなかった。はじめて『新青年』と出会ったのは民国九年に私が上海に帰って以後のことだった。最初に目にした白話詩は康白情の『送許德珩赴欧州』（許德珩の欧州に赴くを送る）¹（題目の大意はそうようだった）で、民国八年の九月に『時事新報』の副刊『学灯』で見かけたのである。この詩は正真正銘の白話（訳者注：口語を基礎にした書面語）で、行を分けて書いた白話詩だった。その中にたとえば「私たちが叫び出す、私たちは行動し始めた」といった句があった。私はそれを看て確かに驚いた。これがつまり白話詩なのか。私は疑問に思った。だがこの疑問が逆に私に勇気を喚び起した。そこで自分の旧作詩の中から二首を写して送った。一つは「鷺鷥」、一つは「息子を抱いて博多湾で海水浴をする」（この詩は『女神』には入れたようだが²、『詩集』には収めていない）。当時の

『学灯』の編集者は郭紹虞で³、私とはもともと面識がないが、詩を送ってまもなく『学灯』に掲載された。自分の作品が初めて活字になったのを見て、本当に言いようのない喜びを感じた。そこで私の度胸はますます膨らんでいき、すでに書いていた詩と新作の詩をすべて次々に送り、送ったものの大半が掲載された。言うまでもないがこれは私の詩作の意欲を更に増進してくれた。

民国八年は「五四」運動の始まった年である。私たちはその年の夏に国内の運動に呼応し、何人かの友人と一つの会を組織したことがあった。その名前は「夏社」といい、（国内の運動のニュースを日本の留学生に知らせる）無料通信の仕事をしたこともある。国内との通信連絡のため、国内の新聞を少なくとも一部を購読しないわけにいかなかったが、当時皆が選定したのが『時事新報』だった。おかげで文芸付録の『学灯』を見ることができ、またそこで康白情をはじめ諸々の詩人の詩を見ることができたわけで、これも偶然の機縁と言える。もし、その時、購読したのが『申報』⁴、或いは『時報』⁵などだったら、もしかすると私の詩作の意欲の発動はもう少し遅くなったか、或いは永遠にその発動しなかったかもしれない。『時事新報』に出会って後、郭紹虞の『学灯』の編集の仕事はおそらく二ヶ月間も続かなかったようだ。彼自身が欧州へ渡ったのである。彼の後任は宗白華だった。宗白華は編集を受け継いでから、ある時期、新詩を好まなかったようで、『学灯』にも新詩の掲載は見当たらない。私が送ったものも発表してくれない。後に彼に一度手紙を出したことがあり、墨子思想を論じたものだったが、この手紙は『学灯』に掲載された。彼の共鳴を得て、彼は私

¹ 『送慕韓往巴黎』（慕韓の巴黎に往くを送る）とすべき。1919年8月29日の「学灯」に掲載。慕韓は曾琦の字であり、許德珩ではない。

² 作者原注：『女神』の中にも収録していない。

³ 郭虞裳とするべき。当時『学灯』の主編だった。

⁴ 近代中国歴史最も長く刊行していた新聞。1872年4月上海で創刊、1949年5月停刊。

⁵ 『時報』には2種類がある。一種は1866年に外国教会によって天津で創刊され、帝国主義が中国に文化侵略を進める道具であった。もう一種は資産階級改良派とされ、荻葆賢が主宰。1904年上海で創刊された。1905年以後保皇派の機関新聞となり、1939年9月に休刊となった。

に手紙をくれ始めた。そして私が今まで送ってそこに溜めておかれていた詩を拾い出して、すべて掲載してくれた。だから民国八、九年の間の「学灯」にはほぼ毎日私の詩が載っていた。

私は従来荘子が好きだった、またタゴールへの接近によって、汎神論思想にたいそう引き付けられるのを感じた。それで、さらに欧州の大哲学者スピノザ（Spinoza）の著作やドイツ大詩人ゲーテの詩に接近した。当時の宗白華も汎神論に傾いていたので、それで二人の関係が一層密接になった。彼は常に汎神論思想を表現した詩を作るように手紙をくれていた。私はその頃、いつからはわからぬ間に、こんどはアメリカのホイットマンの『草の葉』、ドイツのワーグナンのオペラに接近していた。二人ともいくらか汎神論の色彩を帯びており、とりわけ旧式の一切をきれいさっぱり振り切ったホイットマンの詩風は暴風雨のように吹き荒れる五四運動時代の突進精神と合致していて、私は彼の雄渾、豪放で広大明朗なリズムにすっかり動かされてしまった。彼の影響の下で、宗白華の鞭撻に応じ、私は『地球の辺に立って叫ぶ』、『地球、私の母』、『匪徒の頌』、『お早う』、『鳳凰涅槃』、『天の狗』、『心の灯』、『炉中の石炭』、『巨砲の教訓』等の男性的で粗暴な詩を書き出した。これらはすべて宗白華が『学灯』に発表してくれたもので、特に『鳳凰涅槃』は『学灯』の一面を独占し、二日間連続掲載された。それはこの雑誌の連載の新記録を作ったと言える。

『地球、私の母』は民国八年にちょうど学校の年末休みの入った頃に作ったものだ。その日午前中に福岡図書館に行き本を読んでいると、突然詩興が襲ってきた。すぐに図書館を出て、裏にある静かな石畳みの小径で「下駄」（日本の木屐）を脱ぎ、素足で行ったり来たりし、また思い切って路に寝ころんだりした。「地球という母」のそばに寄り添い、彼女の肌を感じ、彼女の抱擁に委ねてみたいと心底から思った。——今から見れば、いささか狂気染みて見えるが、その時は、確かに切実にそう感じていた。そのような状態の中で詩に揺り動かされ、詩に奮い立たせられ、ついに詩の

完成した姿が見えたのである。そこで大急ぎで寓所に走って帰り、紙に書き留めた。まるで自分が生まれ変わったような感じだった。詩が出来上がった後、近く住む広東からきたクラスメートの下宿に行ってみた。その男は横浜に家があり、ちょうど正月のために、帰省しようとしている所で、一つの大きな革トランクを持っていたが、自分で持てないので、持ってくれる人を雇おうとしていた。私はちょうど心中、四海の同胞への感謝の気持ちに充たされていて、この気持ちを今こそ表現できなければダメだと思い、すぐ自ら進んでこの仕事を引き受けた。トランクを肩にかつぎ、二里ほどの道を歩いて、その友達が駅に行き汽車に乗るまで送った。自分が嬉しくて堪らなかった。

長詩『鳳凰涅槃』は、一日に二回に分けて書きあげたものである。午前中に学校の教室で授業を受けていた時、突然詩意が襲ってきた。すぐノートにあちらに一行、ここに一行とその詩の前半を書き留めた。夜になって寝ようとした時、今度は詩の後半の詩意がまた襲ってきた。枕に伏せて鉛筆でひたすら大急ぎで書いた。全身に寒気がして、歯もカタカタ震えていた。この状態であの奇怪な詩も書きあげたのだ。あの詩は中国の再生を象徴している。同時に私の再生も象徴していた。詩語の定型反復は、ワーグナンのオペラの影響を受けており、詩歌の音楽化を意図していた。しかし、精神病理学の立場から見れば、それは明らかに一種の神経性の発作の表れである。その発作はおそらく所謂インスピレーション（inspiration）だったのではないか。

民国八、九年の間には、その種の発作がしばしば私を襲った。いったん襲ってくると、私はまるで神降しの人が神託を砂に書くような状態で、詩を書きはじめる。時にはいくら書いても間に合わない状態となる。しかし、暫くするとこのような発作の時期は消え去っていた。

民国九年の五月、宗白華も『学灯』の編集者という任を降ろしてドイツへ留学に行った。その後任はわれらが「大哲学者」故・李石岑である。この李先生も常に私に原稿を頼みはしたが、しかし

しばしば私に不公平な待遇を与えた。例えば、二人、或いは三人の詩を同時に掲載する時、決して私の詩を最後に置いた。ある時、彼は私の詩のある詩人の詩の後ろに置いたが、しかし、この詩人の詩は『学灯』に私がすでに発表した「鳴咽」という詩の盗作で、いくつかの字句を入れ換えただけのものであった。この些細な事柄に、どういう訳か私はバケツ一杯の冷たい水を浴びせられた気がした。これ以後『学灯』には二度と詩を書かなかった。さらにその冷たい水は荒れ狂う怒濤がふくれ上がるようだった私の詩作の欲望を冷やしてしまった。

ある人たちは作家は「冷」であることが必須だという。これはあるいは一つの真理であるかもしれないが、しかし、どんな「冷」（訳者注：冷淡、冷静、・・・）な作家であっても、その作家にとって必要なのは自らの「冷」であって、決して他人から浴びせられる「冷」ではない。一人の作家に対する冷遇、冷視、或いは、一篇の作品に対する冷言、冷語こそ、作家にとって致命的な毒である。特に一部の世故に長けた人たちは意識的にこのような「冷」の毒を武器として利用しているのだ。これはいかなるひどい侮蔑や謾罵よりも致命的である。これは一種の消極的な殺人法である。例えば継母が子供を虐待する時、殴ったり、罵ったりする代わりに、十分な食事を与えないだけで、少しずつ餓死に追いやるケースもその例である。私自身はこの種の「冷」の加害に慣れている人間であり、おそらくこの種の「冷」に対する免疫力がすでに備わっているのかもしれない。それでも時にはやはり恐ろしい時がある。そうしてすでになりの名声を博している人の若者に対する冷言、冷語にはとりわけ憤りを感じる。

ここでついでに二つのエピソードを紹介したい。一つは、私のいう「翻訳は媒婆である」¹という言葉であり、一つは、郁達夫がこぼした愚痴で、即

ち「文壇を独占しようとする者がいる」²という語である。それは、郁達夫が最初に『創造季刊』の出版予告の広告文に書いたものである。この二つは、いずれも李石岑によって引き起されたことである。李石岑が『学灯』を編集していた時、ある年の「双十節」増刊号に四篇の文芸作品を掲載した。その順番として、一番目は、周作人訳の日本の短編小説、二番目は、魯迅の『頭髮の故事』、三番目が、私の『棠棣之花』、四番目は、茅盾が訳したアイルランドの一幕劇であった。私は『頭髮の故事』がとても気に入らばらしいと思ったが、魯迅が何者かを知らなかった。しかし、順番として小説『頭髮の故事』が翻訳の後に掲載されるのは、不公平だと感じた。そこで、私が激して「翻訳は仲人であり、創作は処女である。処女はもっと尊重すべきではないか」と述べる結果になったのだ。この語がさらに省略されたあげく、「翻訳は媒婆である」となった訳である。この語は、今になっても一部の翻訳者、或いは非翻訳者に嫌悪されていて、人々はこの語が話題にされると、憤激してまるで歯咬みせんばかりに憎悪する。この語を憎む人たちの中には当然私が言い出したことだと知っている者が大勢いるはずである。しかし、大部分の人はこの言葉の來源を知らずただ他人の言ったことを受け売りしているだけのことだと私は信じる。だが実は「翻訳」はやはり「媒婆」なのである。これは「誉め」すぎでもないし、また「けなし」すぎでもない。「媒婆」にも良い人と悪い人がいるし、翻訳にも良いものとよくないものがある。もし「媒婆」という言葉があまりにも大衆化し過ぎて、翻訳家たちの尊厳を傷つけるというなら、少し美化して、「紅葉」（訳者注：「紅葉題詩」の故事に因む言葉である）か、「蹇修」（訳者注：月下氷人という意になる）に改めるか、或いは少し新式にして「媒介」と改めるかした方が良

¹ この語は『文芸論集・論詩』第一節の次の句による。「要するに、「処女は尊重すべき、媒婆は少し抑制すべきである」。

² この語は『創造』季刊出版予告による。「文化運動発生後より、わが国の新文芸は一、二の偶像によって壟断され、芸術の振興の気運までが次第に滅び、絶滅しようとする状態をもたらしている。』『時事新報』1921年9月29日掲載。

かっただろうか。そうすれば、世間様ともお互いになんの揉め事もなく、平和にいられた事だろう。翻訳についてだけ言えば、字数の多寡から見れば、私を超える翻訳家はそんなにはいないと思う。そこで、生半可に断片的な私の言葉を用いて、私が翻訳に反対していると批評したり、或いは創造者の人間は翻訳に反対しているといったりする。こうした女々しいロジックはおそらくわれわれ中国文人の一つの特産品であろう。

郁達夫のいわゆる「文壇を独占」という言葉も、気を回すのが好きな人たちからは、文学研究会のことを嘲っていると思われるが、実際はまったく違う。1920年前後、郁達夫は創造社の同人になる前、ある時期に民鐸社の社友であった。民鐸社は当時『民鐸』という雑誌を発行しており、李石岑が総編集者だった。彼は『民鐸』にあつては相当に独裁者的な風格があり、そのため社内からも彼に対する不平不満が聞こえていた。それに加えて彼はまた『学灯』も編集していた。1921年の年初め、郁達夫は自分の処女作(?)の『銀灰色の死』¹の原稿を李石岑に送り、『学灯』に掲載するように依頼した。ところが、3ヶ月間経っても掲載されず、返事もくれなかった。現在では高名な郁達夫先生であるが、盛名をはせる前には彼はこんな冷遇を受けていたのだ。本当に興味深いエピソードであり、良い教訓となる話ではなかろうか。これは、その年の6月に創造社のメンバーが東京で顔を合わせた際に、郁達夫が自分から私に話してくれたことであり、しかも上海に戻ったら李の所からその小説の原稿をとり戻してくれと頼まれたのである。しかし、6月の末に私が上海に戻った時には、その小説は『学灯』に掲載され、世の人々の目に触れることになったのである。この経緯こそ、郁達夫先生が「文壇を独占しようとする者がいる」という句を書いた動機である。当時李石岑はまだ文学研究会に入会していなかった、郁達夫先生も文学研究会の人と付き合いがなかった。

郁達夫先生がこの言葉を書いた時「文学研究会」の存在が彼の意識の中にあつたわけではないと私は信じている。しかし不幸なことに郁達夫先生は帰国したばかりで、国内の状況が一切分かっていなかった。先生の何の含むところもないひとことが、遂には創造社と文学研究会との間に解けない怨恨を生んでしまった。

昔話を持ち出し、話が十分横道に逸れてしまった。要するに、私の自身の詩作の経験では、まずタゴール等の影響を受けて、淡白を重んじた。その後、ホイットマンの影響を受け、詩のスタイルがようやく奔放になり始めた。その奔放が一たび外部の冷気を受けるや、こんどは氷の塊に近い状態になった。多くの批評家たちはこの経緯を知らず、私の奔放かつ粗暴な詩は私の初期の詩的試みで、後に技巧を増すにつれて次第に淡白になったとみなしている。まったく事実とは違う。私はもともと淡白好きな人間で、たとえば陶淵明の詩は私の性にあうし、唐詩の中では王維の絶句が好きで、これらはすべて淡白の類に属するはずだ。しかし、「五四」運動の後、私は一時的に爆発し始めた、本当に火山のように爆発を起こしたのだ。他人から見ればその粗暴に嫌味を感じるのだろうが、私には深い意味のあることだった。私はあのような爆発の再来を願っている。

ゲーテとの出会いも民国八年の夏であった。当時、彼の『ファウスト』の「夜」を訳していた。書斎での例の独白であり、その年の『学灯』「双十節」増刊号に掲載されものだ。その次の年に今度は『ファウスト』第二部の第一幕「風光明媚な地方」を訳し、これも『学灯』に掲載された。この二回の掲載があつたおかげで、民国九年の初夏に当時の「共学社」の慫慂を受け、『ファウスト』の全訳に取り掛かった。夏休み中に第一部の訳を完成しただけで、発表する機会はなかった。

その他、詩に関する仕事は比較的に順調で、得意だった。『卷耳集』、『ルバーイヤート』そして、シェリーの詩の翻訳がある。これらの仕事は私の詩作の経歴にとって時代を画することはできない。『創造週報』時代に作った詩の中にはいくつか第

¹ 郁達夫の最も初期の作品。1920年著。1921年7月上海『時事新報・学灯』に発表され、後に小説集『沈淪』に収録。

二期のホイットマン式への回帰の傾向がある。しかし、周囲の重苦しい情勢が詩の英雄的な格調とは相応せず、また自分でもその空虚な叫喊を嫌ったので、いくつかの詩を作っただけですぐ消えてしまった。『瓶』は一種の独創的な形式だった。それは「五卅」前の一つのエピソードであって、「五卅」が来るや、『瓶』もまさしく「墓前に倒れた一つの割れた花瓶」¹のようになってしまった。『恢復』は1928年大革命の失敗後、上海で大病をし、病み上がり時期に書いたものである。中にはまだ読む価値があるものがいくつかあるが、気魄に欠けており、時にはこれまで以上色濃く悲傷な気分を帯びているように思う。

私は詩について依然として断念していない。だからと言って、私は一般の詩人と違って、必ず「詩を作」らなければいけないとは思っているわけではない。ある人から私は努力しないとわれ、またある人からエッセイに降伏したと言われている。これらの非難はいずれも私の本心に触れていないように思う。私は本心ではずっと期待している。きっといつか、詩の発作がまた私を襲ってくるだろう。私はまた休火山が再爆発するように爆発するだろう。その時、私は英雄の格調で英雄の行為を書きたい。高雅な文士たちが喜ばない粗暴なスローガンと標語を思い切って書きたい。私は喜んで「標語を書く人」、或いは「スローガンを叫ぶ人」になってみたい。必ずしも絶対に「詩人」になりたいわけではない。私はとりわけ信じない。「楊柳だけが樹木で、木綿は動物だ」²ということ。

1936年9月4日夜

「私の詩作の経緯」解題

本文は郭沫若「私の詩作の経緯」（「我的詩作的経過」、以下「経過」と略記）の翻訳である。作者の郭沫若は、中華人民共和国建国後は魯迅と併称されたほどの、中国を代表する著名な文学者で、戦後の日中関係を動かしてきた政治家の一人でもあったから、その政治的経歴はよく知られているだろう。ここでは、専門家以外には余り知られていないだろう文学活動を中心にその経歴のあらましを辿っておくことにする。

郭沫若の生涯

郭沫若（1892－1978）は今の四川省樂山市沙湾の出身である。1914年日本に留学、一高特設予科から岡山の第六高校を経て18年九州帝国大学医学部に進んだ。岡山時代に日本人佐藤富子と恋愛結婚している。本文の中で安娜（アンナ）の名で出てくる女性である。23年九大を卒業したが、医者にはならず文学に従事する。21年九大在学中に詩集『女神』を出版、一躍名を知られ、その詩人としての地位を確立した。

同年、郁達夫、田漢ら日本留学生と文学グループ「創造社」を結成し、文学活動を開始、中国ロマン主義文学の旗手となっていった。九大卒業後、帰国して文学活動を続けるが、国共両党の合作下に、26年国民国家建設を目指す北伐戦争が起こるや、それに参加、国民革命軍総政治部副主任に任じた。だが国民革命が進行していくと、帝国主義列強は、北伐への干渉を強め、蒋介石ら国民党右派を抱き込む。蒋介石らは次第に反共の立場を露骨にし、27年4月ついに反共クーデターを起こし、国共合作は崩壊した。それより前の27年3月、郭沫若は蒋介石を批判する文章を公開して、彼と袂を分かっていた。反共クーデター後、共産党は武装蜂起をふくむ絶望的な反撃をくりかえしつつ敗退。その一員であった郭沫若は、国民党の指名手配受けて、28年日本に亡命するのである。

こうして彼は、37年日本を脱出して帰国するま

¹ 詩集『瓶』の最後の一首詩の最後の句である。

² 作者原注：南方にはこの木綿の樹が多く、別名は「英雄の樹」という。

で約 10 年間千葉県市川に住んだ。亡命の経緯からも明らかなように、郭沫若は反蒋介石派の大家として政治的にもすでに知られた人物だったし、加えて『女神』の詩人、中国文壇を二分する文学結社・創造社（もう一つが、「経過」にも出てくる文学研究会）の中心作家として文学界では余りにも著名であった。その生活は常に特高警察の監視下にあり、かなり窮屈なものであった。

だが、彼はその間、文学作品の創作、外国書籍の翻訳を続け、また、文字学、古代思想などの研究に打ち込み、それぞれの分野で優れた業績をあげた。この亡命時代は経済的にもかなり困窮していたが、日常生活は郭沫若の生涯ではもっとも落ちついた時期ではなかったろうか。『創造十年』（32 年 9 月刊）をはじめとする自伝小説はこの亡命時代に書かれている。自分の前半生を回想する余裕が、強いられた「余裕」だったとは言え、ようやく生まれたといえるだろう。「経過」もこの時代に書かれている。

母国では 30 年 3 月に左翼作家が大同団結して「左翼作家連盟」（略称「左連」）が成立、郭沫若もそれに参加している。東京にも支部が成立し、35 年 5 月機関誌『雑文』を創刊した。この雑誌の編集には郭沫若は最初から関わり、寄稿もしている。だが『雑文』は 3 号を出しただけで発行禁止となり、第 4 号からは郭沫若の提案で『質文』と名をかえて発行される（なお後述）。「経過」はこの『質文』に掲載されたものである。

37 年 7 月、日中戦争が勃発。郭沫若は秘かに日本を脱出して帰国、抗日の戦いに身を投じた。その後の郭沫若は文化界の抗日の指導者として活躍することになる。佐藤富子と家族を日本に置いたまま、許立群と結ばれるのもこの時期である。新中国成立後は副総理、中国科学院長に任じ、中国文化界の顔として外交にも携わり、政治、学術界に影響力をもった。66 年 4 月、文革開始直前に、自分の過去の業績を全否定するような「自己批判」を行ったと伝えられ、それが政治的な危機を乗り越えるための保身と受け取られたこともあり、以後急速に文学者としての影響力を失っていった。

中国でもそうであり、日本ではなおさらそうであった。78 年 6 月逝去。享年 87 歳。

「私の詩作の経緯」について

郭沫若の文学活動は、大きく、1) 詩、2) 小説（自伝を含む）、3) 戯曲、4) 翻訳に分けることができる。日本で、その文学活動についての研究が本格的に始まるのは戦後になってからのことである¹。このうち詩については第一詩集『女神』の研究が圧倒的である²。そしてそれらの研究が基本資料としているのがこの「経過」と、『創造十年』である。伝記研究のなかには、もっぱらこの「経過」だけを資料としているものもあるほどである³。『創造十年』は、文学者・郭沫若を誕生させた日本留学時代の回想で、彼がどのように「現代詩人」となっていったかが、克明に書かれている。その詳細さは、部分的には「経過」をはるかに凌いでおり、また日本語による翻訳もある⁴。

「経過」は、題名通り「作詩の経緯」に重点を置いていて、幼年時代から（それとて、実は『少年時代』などの自伝小説にすでに書かれていることではあるのだが⁵）30 年代までの作詩生活をふりかえっている点に特色がある。また、ここには『女神』時代の郭沫若の詩的情熱が『学灯』の編集者・李石岑の冷遇によって冷めてしまったことや、当時の中国文壇の大問題であった創造社と文

¹ この点については、拙稿「日本における郭沫若研究」熊本学園大学『文学・言語学論集』第号、2000 年 12 月刊、に述べた。

² 拙稿「日本における『女神』研究」熊本学園大学海外事情研究所『海外事情研究』第号、2012 年 3 月刊予定、を参照されたい。

³ 例えば、秦川『（中国現代作家評伝）郭沫若評伝』重慶出版社、2001 年。

⁴ 松枝茂夫訳『創造十年、続創造十年（岩波文庫）』岩波書店、1960 年 8 月、小野忍、丸山昇訳『創造十年 続 他—郭沫若自伝 3（東洋文庫）』平凡社、1969 年 12 月、など。

⁵ 『少年時代』は、生い立ちから日本に留学するまでを回想した 4 編の文章、「我的童年」（1928 年）、「反正前後」（1927 年）、「黒猫」（1929 年）、「初出夔門」（1935 年）をまとめたもの。「郭沫若自伝・第 1 巻」として 1947 年 4 月上海海燕書店より出版された。今、『郭沫若全集』文学編第 11 巻に収める。

学研究会との不和、そのきっかけとなった郁達夫の「文壇壟断」の発言や、郭沫若の「翻訳媒婆」説などの(郭沫若から見た)真相が語られており、その点も興味深い。また、彼がこの文章で、「詩を捨てたわけではなく、ふたたび詩を書く」という決意を明らかにしていることなども、興味深いところである。

掲載誌『質文』について

掲載雑誌『質文』は前述したように東京左連の機関誌である。東京左連は『左聯詞典』によれば「1930年下半年から31年の間に成立」し、「31年9.18事変の発生でメンバーが帰国」した(ことが原因で活動中止になった)が、33年9月林煥平が来日して組織が再建された。だが36年本国の左連が解散し、東京左連も解散した、とされる¹。だが、小谷一郎の精緻極まる研究²によれば、東京左連は1931年6月ごろに成立、最初の活動停止も、9.18を原因とするメンバーの帰国によるものではなく、33年3月、「日本プロレタリア科学同盟華僑班」を口実とした、中国人留学生に対する大規模な検挙事件が起き、東京左連は壊滅的な打撃を受け、た「華僑班」事件によるのだという³。

さて、華僑班事件で壊滅的な打撃を受けた東京左連は、早くもその秋には周揚らの指示を受けて来日した林煥平によって再建され、新たな活動を開始する。その活動の大きな柱が文芸誌の発行だった⁴。『質文』もその一つである。前述したように『質文』は、前身を『雑文』といい、35年5月に創刊された。北岡正子によれば、「創刊号は東京で編集、上海で出版発行したが、第2号からは印刷・

出版も東京で行い、それを上海で発行した。中国国内での反響は大きかったという。為に、国民党当局にマークされ、日本でも「共産主義」の嫌疑がかかり、警告を受けて印刷所も他に変えねばならなかった。第3号(35年9月20日)に至り上海で発禁となった。そこで、第4号(35年12月15日)から、誌名を『質文』に変え、「質文社から発行することにした」のだという⁵。

郭沫若は再建東京左連の活動に深い関心を寄せていた。35年5月雑文社の魏猛克、陳辛人、孟式鈞の3名が彼を訪問し、郭沫若は左連東京支部への参加と、『雑文』誌への寄稿を承諾した⁶。これ以後、郭沫若は雑誌への寄稿のみならず、具体的な活動にも参加し、雑誌に掲載する文章の添削などもしたようだ。『雑文』発禁後、『質文』と誌名を変更したのも郭沫若の提案で、ゲーテの『詩と真実』に依ったのだという(「詩」が「文」に、「真実」が「質」に対応するということだろう)⁷。

「経過」が『質文』に掲載されたのは、こうした経緯に照らせばごく自然なことだったのである。

「経過」背景の幾つかの説明—訳注に代えて

「経過」には郭沫若による注(著者原注)と、全集編集者による注が付せられており、いずれも翻訳されているが、なお、わかりにくい点が少ない。以下は、それらについての解説である。

1. 『瓶』『恢復』『前茅』 …1921年処女詩集『女神』を出して以後、日本に亡命する28年までに、彼は『星空』(23年10月、上海泰東書局)、『瓶』(27年4月、創造社出版部)『前茅』(28年2月、創造社出版部)、『恢復』(28年3月、創造社出版部)と4冊の詩集を出版している(いずれも『郭沫若全集』文学編第1巻所収)。『瓶』は最初26年4月『創造月刊』に掲載され、翌年、創

¹ 姚辛編著『左聯詞典』光明日報出版社、1994年12月、の「東京左聯」の項による。

² 小谷一郎(A)『一九三〇年代中国人日本留学生文学・芸術運動史』汲古書院、2010年11月刊、およびその続編(B)『一九三〇年代後期中国人日本留学生文学・芸術運動史』汲古書院、2011年12月刊。

³ 成立に関しては小谷(A)、華僑班事件については、同じく(A)189頁。

⁴ こうした活動および彼らが発行した雑誌については小谷(B)に詳しい記述がある。

⁵ 北岡正子「『日文研究』という雑誌(下)」東大中国学会『中国—社会と文化』第5号、1990年6月刊、252頁。

⁶ 魏猛克「回憶左聯」『左聯回憶録』(上)、中国社会科学出版社、1982年5月、395頁。

⁷ 蔡北華「回憶東京左聯活動」『左聯回憶録』(下)、702頁。

造社叢書として出版された。「献詩」のほか 42 首から成る、恋愛詩を収めている。『前茅』は 21 年から 24 年までに書かれた詩 23 首を収めているが、それらはいずれも社会主義への郭沫若の思想的な転換を示すものである。『恢復』ははっきりと階級的な立場を明らかにしていて、「私の詩、それは私の宣言、私の階級はプロレタリア階級」（「詩の宣言」）と述べている。郭沫若は「経過」を書いた段階ではすでにプロレタリア詩人として立っているのに、自分の詩が『女神』、『星空』（その詩の多くは消極的で現実逃避の情緒を表現していると評価されている）、『瓶』の作品までしか評価されていない、プロレタリア詩人としての自分が評価されていないということにいら立っているようである。

2. 十三歳で小学校に入って… 郭沫若は 1897 年 6 歳の年に自宅に設けられた家塾に入り、旧式の科挙に対応した教育を受ける。だが科挙は 1903 年を最後に廃止され、各地に新しい学校ができる。樂山にも 1905 年樂山県高等小学堂が設立され、翌 06 年から開校となる。郭沫若はこの年初めて小学校に入学する。15 歳であった。

4. 更に一步進んで詩と向かい合う意欲をもとうとしなかった。…『創造十年』の中で郭沫若は、中学時代に「克服しがたい文学的傾向」を作り上げたが、日本に来た時には「この傾向を克服することを決心していた」、当時は富国強兵の時代で文学は唾棄されており、自分もそういう潮流に迫られて国を出た人間で、「文芸に向かう素質を有してはいたが、何としてもそれを克服しなければならなかったと考えていた」と書いている。

5. 私とアンナとの恋愛…郭沫若は 1915 年第一高等学校特設予科を終えて岡山の第六高等学校に入学する。16 年 7 月、夏季休業中、東京に行き聖路加病院に結核で入院中の友人・陳龍驥を見舞うが、陳は 8 月に逝去。陳の死後の始末のために病院に行き、そこで看護婦だった佐藤富子に出会う。富子は仙台の出身、郭より 2 歳年下だった。彼は富子をアンナと呼び、二人は郭沫若が岡山に帰ってからも周に 3、4 通の手紙を交わしあうようになり、この年の 12 月から岡山で同棲するよ

うになる。

6. 『学灯』の編集者は郭紹虞で…注 4 にあるように「郭虞裳」とすべきである。注 3、5 も同じだが、この頁以外にも散見する誤り（記憶違い）は、郭沫若が資料をもたず記憶にたよってこの文を書いているからである。

7. 国内との通信連絡のため、国内の新聞を少なくとも一部購読しないわけにかなかった…ここは原文がそうなのだが、これでは意味がよく分らない。『創造十年』では「（夏社を組織した）目的は抗日であって、もっぱら日本の各種の新聞雑誌に出ている中国侵略の言論と資料を蒐集し、中国文に翻訳して中国内の各学校各新聞社に送ろうというのだった」「こんな無料通信社の仕事をやっていたため、国内の新聞を少なくとも一種は購読せざるを得なかった」とある。

8. 宗白華…宗白華（1897 年－1986 年）は安徽省の人。中国現代美学の建設者とされる。郭沫若、田漢との往復書簡を『三葉集』（1920 年）として出版。これは郭沫若研究の重要な資料でもある。詩人で詩集『流雲小詩』（1947 年）がある。

9. 私はその頃、いつからかはわからぬ間に、こんどはアメリカの詩人ホイットマンの「草の葉」…『創造十年』では「大学二年のとき、ちょうど僕が『学灯』に投稿を始めたころ、僕は何気なく有島武郎の『叛逆者』という本を買った」とあり、その中では彫刻家ロダン、画家ミレー、詩人ホイットマンの 3 人の芸術家が論じられていたのだが、それを読んでホイットマンの『草の葉』に接近した、と書かれている。

10. われらが「大哲学者」故・李石岑…李石岑（1892－1934）湖南省の人。東京高等師範学校の出身。留学期間中、袁世凱反対運動を起こし、また『民鐸』を創刊した。19 年帰国、商務印書館の編集者となり、また上海の多くの大学で哲学、心理学を講じた。五四新文化運動期に、デューイのプラグマティズム、ベルグソンの生命哲学、ニーチェの超人哲学、ルソーの論理実証主義など西欧の様々な哲学思想を紹介し、文名大いに振るった。だが私生活では恋人との関係のもつれから多額の

慰謝料を請求され、それに応えようとして結局命を縮めたとも言われた。郭沫若がここで「大哲学者」と言っているのは、単なる思想の紹介者にすぎないという批判のほかに、彼の私生活への揶揄もあるのかもしれない。

11. 「翻訳は媒婆である」…1921 年郭沫若が李石岑に手紙を書き「国内の人士はただ媒婆だけを重視し、処女を重んじない。同様に、翻訳だけを重視し、(創作) 生産を重視しない」「処女は尊重すべきであり、媒婆はやや抑えられるべきだ」(『学灯』1 月 15 日) と述べた。これを読んだ鄭振鐸が『文学旬刊』(21 年 6 月 10 日) に「処女与媒婆」を書き「翻訳の性質はもちろん媒婆に似たところがある。だが翻訳の大効用はこういうところにあるのではない」「翻訳を媒婆とみなすのは、翻訳を軽く見すぎだ」と郭沫若を批判、作品を翻訳するのと、創作するのとは同じように重要だと述べた。郭沫若の文はこの事実を背景にしている。「媒婆」は当時の職業的な結婚あっせん人で、やや蔑みの語気があるのだろう。鄭振鐸は郭沫若たち創造社と対立していた文学研究会の発起人であり、商務印書館の編集者、翻訳を通じて中国の新文学を向上させようと努力していた人であった。

以上、分かりにくい事実についてその背景を説明した。もっと多くの「訳注」が必要だと思うが、能力、紙幅、時間の制約で、ひとまずここで筆を措く。

なお、この翻訳は、日本における郭沫若研究の進展に貢献できるものであることを信じて、岩佐が訳者(顧雯)に勧めて成った。翻訳は顧雯がおこない、岩佐が日本語表現の習慣に合わないごくわずかの修正をほどこしたほかは、訳者によるものである。

(2011 年 10 月)